



名古屋学院大学
元理事長
伊藤 信義
同窓会直前会長
占部 憲一



瀬戸から名古屋へ、キャンパスの移転。 学生募集に苦労した変革の時代。

**会費のシステムを整え、
資金不足を解消。**

占部 同窓会前会長（以下、占部） 私は1994年に同窓会会長に就任して2008年まで約14年間、会長を務めました。当時は資金不足で、どうやって資金を集めるかが第一のテーマでした。組織を運営するためには資金が必要ですから。まずは会報でご案内しましたが、なかなか集まらず、それならば、と卒業生から卒業前に終身会費としてお預かりするよう役員や大学と話し合っただけです。

伊藤 名古屋学院大学元理事長（以下、伊藤） 資金不足が解消されてからは順調に？

占部 それまで年一回だった会議を年10回行うようになって運営がスムーズになりました。皆さんからお預かりした大切な会費を有効に活用しなければと、会報を年一回郵送するシステムが整い、ホームカミングデーも年一回開催できるようになりました。

伊藤 名古屋学院大学の同窓会は大学と一体となっていて大変、健全な運営をされています。占部会長が作ってくださったシス



占部 憲一(左)、伊藤 信義(右)

テムが今に受け継がれ、同窓会の運営のベスになっていきます。若い世代にも母校や同窓会に対する思いが引き継がれ、卒業後も母校を訪問してくださる方がもっと増えるというですね。

ラグビー部が

**全国地区対抗戦優勝、
同窓会の輪が広がるきっかけに。**

伊藤 名古屋中学校・高等学校の校長、理事長を務め、2003年に名古屋学院大学の理事長に就任し、2012年まで務めました。

占部 中学、高校をよく理解されている伊藤理事長に大学の理事長になっていただき、協力体制を強めることができましたね。

伊藤 私が就任した当時は、この大学も学生募集に苦労していた時代。私学の経営者として定員の確保は重要な課題です。そのため何ができるかを考え、瀬戸から名古屋へ、当時4学部中3学部のキャンパスを移転するという大きな決断をしました。一番、苦労したのはその頃ですね。

占部 当時は郊外型キャンパスが普通でしたが、名古屋学院大学はどの大学よりも早く名古屋市内に戻ってきましたね。

伊藤 異論があれば移転も理事長もやめようという覚悟を決めて理事会で提案したので、幸いにも反対者はなく、名古屋市も協力的に動いていただき、地区の説明会でも

暖かく迎えていただきました。

占部 瀬戸キャンパスは、緑豊かで広大な素晴らしいキャンパスですが、通学やアルバイトに不便というだけの理由で受験生が減ってしまったのも問題ですからね。

伊藤 名古屋キャンパスが完成したことで、おかげさまで受験生が増え、特に女子学生も増えました。新入生を迎えることで年々活気に満ちていく様子を見て安心していきます。名古屋キャンパスの発展をはじめ、学生や部活動の活躍などを同窓生の皆様には温かく見守っていただきたいと思いますね。

占部 全国地区対抗大学ラグビーフットボール大会では、14年ぶり2回目の出場で初優勝を遂げ、多くの諸先輩に応援いただきました。

伊藤 これをきっかけに同窓生のつながりが一層広がる、素晴らしいことですね。

占部 約3万部の会報を発送していますが、毎回600部程度は戻ってきてしまいます。つながりを継続し、広げるためにも、住所が変わったら、ホームページなどから同窓会へ連絡していただきたい。これは切なる願いです。



名古屋学院大学 元学長
(現 国際文化学部長、教授)
木村 光伸
同窓会元監事
下村 直己



緑豊かで広大な瀬戸キャンパスは、 いつの時代も変わらず、 名古屋学院大学の誇り。

**瀬戸キャンパスを中心に
進んだ教育改革。**

木村 名古屋学院大学元学長（以下、木村） 私が学長に就任したのは50歳の時で、若い世代の学長として期待もされ、総合大学を目指して新たな学部・学科を開設したり、全学的な教育改革を実行して「カリキュラム2000」を作るなど、21世紀に向けていろんなチャレンジが必要な時代でした。1997年には大学院が設置され、名古屋市内に「さかえサテライト」が開設されましたが、瀬戸キャンパスを中心として改革を進めていきました。

下村 同窓会元監事（以下、下村） 緑豊かで広大な瀬戸キャンパスは、いつの時代も変わらず我々の誇りですからね。

木村 創立35周年を迎えて卒業生は2万人を超え、名古屋の経済界のトップクラスの企業の経営者も多く輩出する中、最高の教育を提供すれば、学生は集まるだろうと考えていました。そのために、学びやすい環境を整えることから始めました。民間企業と連携したスクールパスの無料化、学生と教職員、大学を情報ネットワークで結ぶ

CCSの導入、学生の社会人としての成長をデザインする新しいキャリアセンターの設置など、全国でも先駆けて学生の目線に立った改革を進めました。

下村 国際文化学部の現学部長である木村先生は、国際感覚に優れ、全体を見る広い視野を持つ方で、新しい意識の風をもたらしてくれた学長の就任でした。

木村 教養豊かな先生が多数いらっしゃって、国際化が進んでいく時代にあって、この大学でならできることはたくさんあるだろう、どんな方向にも変えていけると感じていましたね。

**同窓会50周年とともに、
瀬戸キャンパス50周年。**

木村 瀬戸キャンパスには同窓会室があって事務員が常駐し、役員の方たちが毎週のように会議に訪れていたため、同窓会とは常に協力体制にありました。下村さんは同窓会との関わりは長いんですよね？

下村 私が同窓会のお手伝いをするようになったのは、占部会長の時代ですから1990年頃です。広報委員長として会報



下村 直己(左)、木村 光伸(右)

の作成やホームカミングデーの企画を担当。2008年には同窓会40周年の記念式典の企画運営も担当しました。最近ではホームカミングデーを名古屋キャンパスで開催するようになって、瀬戸キャンパスで学んだ同窓生からは、瀬戸キャンパスを懐かしむ声もあります。そういう場所は大切に残してほしいですね。

木村 今年の受験生は1万4千人を超え、大学は新たな改革の時代を迎えています。これからは名古屋キャンパスを卒業した同窓生も増えてきて、中心が名古屋キャンパスにシフトしていくと思いますが、それを大学の発展とご理解いただきながら、瀬戸キャンパスも大切にしているということは発信していかなければいけません。同窓会50周年とともに、瀬戸キャンパスも50周年を迎えます。ルーツは瀬戸キャンパスにあること、2つのキャンパスが一体となって名古屋学院大学であること、その接点となるのが瀬戸キャンパスを卒業された同窓生の皆さんです。社会人として、経営者として、その経験と知識を学生に伝授していただきたいと思っています。

下村 まだ名古屋キャンパスを見たことがないという人には、ぜひ、新しい名古屋学院大学の今の姿をご覧いただきたいですね。若い世代にもっと参加いただけるよう働きかけ、大学との連携をもっと深めることができたなら理想的だと思います。